

千艘秋男編

續撰吟抄

下

古典文庫

千艘秋男編

續撰吟抄

下

古典文庫

平成七年八月二十日印刷発行

非売品

編者 千艘秋男

発行者 吉田幸一

印刷者 白橋印刷所

製本者 共伸舎

抄吟撰続
下

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話 〇三(三九一〇)二七一七
振替口座東京 〇〇一九〇九一四五九七番

続撰吟抄

下卷

目次

続撰吟抄	六
続撰吟抄	七
続撰吟抄	八
『続撰吟抄』小考	千艘秋男
和歌初句索引	

三〇七

二〇三

一三〇

七

五

続撰吟抄 六

天文九年五月

落花

後柏原院

2273

うら山し花はひさしきさかり哉世々の春かせ吹つたへつゝ

堯空

2274

ます鏡とは一尺まるき鏡といへり
しるしをく筆に何かはます鏡手にとりてみぬいにしへもなし

統秋身まかりける時、いたみの十首内

2275

めのまへにきえぬ面影物いはゝたえす昔のことやかはさん

実世元服のとき

2276

もとゆひのなかきよはひにひかれてやこの子の千世のはしめをそみる

禁裏三首懷紙に 大永三十廿五

枕上時雨

後柏原院

2277 ね覺してきかすはと思時雨まで老の枕にそふ哀かな

レ1オ

牆根寒草

2278 枯やらぬかきねの草の色もなし日影にもるゝ霜を残して

寄催馬楽恋

2279 ^{美作国}いかにとか我名もたてん夢にたにくめのさら山道はたえしを

二品知親王

2280 又きくもおなし枕のさ夜しくれいつかは雪に松かせのこゑ

2281 朝霜もよきてをかなん冬かれに一もと残る菊のかきねは

2282 なにとかくつらきふしにはへたつらんあしかきまかき一重なからに

堯空

2283 いかにて枕さためんさよ時雨月もさし入露もりけり

2284

みをむすふかきねのむはら紅の色めつらしき霜かれのころ

2285

あたらしき年のいくとせつれなさのおなしつらきをみにはつみけん
「1ウ

沙弥宗清

2286

宿は荒て老はね覺の枕より跡より袖にふる時雨哉

2287

山かつのかきねの朝なつまぬまも摘らん霜のふるはしるしな

2288

うき筋に思ひやなさん夏引の糸くりかへしうらみやりても

夜寒重衾

後柏原院

2289

さゆる夜の嵐もきかすおのつからふすまやこゝの重なるらん

雪中歳暮

2290

跡つけて行年ならはおしと思雪のうへをもいかにとかみん

関路行客

2291

行人も木かくれふかき相坂は逢ともなしやおなし関路に

二品知親王

2292 よとこねとは夜の床ねなり、然を呉竹のよとをき給へり
呉竹のよとこね寒しかさねても衾のうへに霜やをくらん

「2才

2293 くる春も今行としもいかならん跡ふりまかふ雪の通路

2294 ゆくくと戸さしせぬ世を思にも人の心そあふさかの関

堯空

2295 かさねても猶霜雪の関さむみ夜のにしきのふすま成けり

2296 行とくと跡はなくともあら玉のとしは雪をやきえんとすらん

2297 かきりなく行あふさかの関にこそ戸さしせぬ代の道もみえけれ

沙弥宗清

2298 さゆる夜はたへて衾の霜いくへつゝみかねたる夢のさむらん

2299 とろくとはひくくなり
降つみて雪をも売や炭車くれ行としに声のとろく

2300 なさけあれや関より西は月ならて誰哀まん路の行末

内裏御月次うちに 大永三十一廿五

山早春 巻頭

宗清

ㄥ 2 ウ

2301 山城国
年越し山は朝日に雪きえて霞の底のうちの河浪

浦霞

後柏原院

2302 摂津国
あま人やみるらん浪の夕霞なにはのうらはこゝろなくとも

戸外梅

堯空

2303
わすれては袖をやふれん柴の戸の心もしらすにほふ梅かゝ

野春雨

知一

2304
遠き野の霞を分て行人の袖におほゆる春雨の空

ね覚荻風

後柏原院

2305
見しことの夢のなこりもいとゝしく枕露けき荻の上かせ

叢露

堯空

2306
色草をつくしてにはふませの中の花には露も置まよふらん

林月

宗清

ㄥ 3 オ

2307 名にたかき月の林は光なき身にしおられん桂ならめや

浪上月

知—

2308 立かへり袖こそぬるれ思ふ人とみぬ影おしき浪の上の月

河時雨

後柏原院

2309 大和国 三室山嵐やをくる立田河はては時雨の雲をうかへて

湖水鳥

堯空

2310 さくら浪夢のまなくも水鳥の鳩のうきねや侘て鳴らん

湊千鳥

宗清

2311 ほされめやかたしく袖の湊舟よるはすからに千とり鳴こゑ

初恋

後柏原院

2312 恋やこれ心にとへは何ゆへと我たにしらぬ物おもふかな

顕恋

知—

2313 今はやすむ鷺鳥の名もつらし水さへあさき池の心に

ㄥ3ウ

洞松

堯空

2314

住すてし人や幾世の石の床松の嵐の吹にまかせて

狩獺

宗清

2315

後の世を誰にゆつるの一筋に心ひくらん罪のかり人

詠花光契万年和哥

天文五二廿五

御製

2316

万代と色をましける春の花又あら玉のとしの光に

堯空

2317

いくよろつ世をへて花は久かたの光ととももの九重の春

禁裏百首うちに

天文五五廿四

御製

2318 けふに明て空に月日もあら玉のことしわか世の春や立らん

月出山

2319 山のかひとは山のあいたなり
待てみん山のかひそと秋かせの雲をはらへはいつる月影

寄玉恋

2320 人よいかにたのむなきさはいせの海やひろはん玉のよるへをそ思ふ

暁見漁舟

2321 みるめをはかけてもしらし海士小船遠山かつら沖つ白浪

詠三首和哥 同六廿五

夏草露

御製

2322 朝露にしはしてる日もかけろふの小野ゝ夏草しけさまされる

夕納涼

2323 夏衣ひとへなるしも夕すゝみ身にちかくなる秋やまつらん

社頭櫺

2324 さか木葉のさして此度おさまれる世をみまほしと七の神かき

立春風 卷頭

天文五
八廿五

方一親王

2325 雲かせもみとりに明て山のはのはる立けふにかすむ空かな

霞始聳 同

御製

2326 峯の雪きえし空より春の色をかさねてみする朝霞哉

橘

2327 玉すたれかせのかほりは六種にもあらぬをそふる軒の立花

鴈

2328 この比といはぬはかりそくるかりの秋かせふけは萩の上の露

向炉火

2329 うつみ火のきえぬもうすぐ雪は猶降そふまゝの聞のさよ風

「5才

禁裏 大神宮御法樂中に 天文五九四

立春 御製

2330 あし原の中国よりや立かへる春を都のはしめなるらん

松藤

2331 春の池の汀の松はぬれてほすみとりもふかしかゝる藤浪

早苗

2332 打むれてけふも暮けりいとまなき民の心にとる早苗かな

松虫

2333 草も木も今かうつろふ霜の後名にあらはれて松虫のなく

擣衣

2334 さ夜枕おとろく程はきく人の夢をかへしてうつ衣かな

寒月

2335 霜こほり袖にそはらふむかひみる月は千さとのさゆる光に

レ5ウ